

# 特集1 中学生海外派遣報告

ケアンズ

オーストラリア



この海外派遣の最大の難関、そして最大の楽しみは、現地の家庭でのホームステイでした。ずっと一

## 家族になれた



8月15日から22日までの8日間の日程で、第17回幸田町中学生海外派遣団(生徒22人引率者5人)がオーストラリアのケアンズ市を訪問しました。  
 4泊のホームステイ、セントメアリーカソリックカレッジスクールへの体験入学を行い、オーストラリアの人々や現地の学校との交流を行ってきました。  
 感性豊かな中学生が、同世代の若者との交流や体験を通じて学んだことを報告します。



緒だつた仲間と離れ、ホストファミリーと初めて対面した時、「いよいよ英語圏に突入だ」という思いが込み上げてきました。  
 ホームステイで感じたこと、学んだことはたくさんありますが、

### 第17回幸田町海外派遣団

- |                                |                      |               |                |
|--------------------------------|----------------------|---------------|----------------|
| 幸田中学校<br>宇都野直大<br>三浦智孝<br>三浦香織 | 加藤大智<br>池長あり<br>渡辺ベ織 | 拓也みちえ<br>ちえ早紀 | 西田圭吾<br>上村みなみ  |
| 南部中学校<br>芦田圭史<br>嶋下加奈子         | 壁谷長谷                 | 隆史り友          | 海老原早紀<br>山本奈津美 |
| 北部中学校<br>西原大策<br>石黒真衣<br>鈴木さやか | 平松大須賀<br>野坂美久        | 輝理恵く<br>美久    | 吉本久晃<br>島田怜佳   |

特に印象的だったのは、家族の仲の良さです。家族みんなで食事をしていると、父親が冗談を言ったり、家族の趣味で盛り上がりたりしていました。そのようなとき、私は、家族の温かさに触れることができました。家族の中に入っていったように思いました。また、私のホストファミリーは、いつも笑顔で親切で、私が話しかけると、分かりやすいように話してくれて、そのようなことから、家族の一員のように仲良くなれたと思いました。

最大の難関、そして最大の楽しみだったホームステイは、「日本に帰ってから実践したい」ことを、一番多く吸収することができた機会となりました。

(幸田中 三浦 香織)

## 太古からの贈り物

僕たちが滞在したケアンズは、人口約13万人の観光の町です。亜熱帯の気候に位置するため、緑の生い茂るのどかな町でもあります。

ケアンズから少し離れた所に、キュランダ鉄道やグレートバリアリーフがありました。

キュランダ鉄道は、世界最古の原始の森の中にありました。鉄道で大自然を駆け抜け、森の壮大な存在に心を奪われました。

グレートバリアリーフは、日本

をすっぽり包んでしまおうぐらい大きい約2000キロにも及ぶ、「世界最大の珊瑚礁」です。その延々と続く透き通った海に感動しました。



これらオーストラリアの大自然は太古から受け継がれてきた宝です。また、この宝を守り続けてきたのは、人々の自然を愛する心と思いやりです。この素晴らしい自然を守っていかなければならないということを思い直しました。

(南部中 壁谷 隆史)

## 自分の個性を生かして

今回の海外派遣で体験入学をさせていただいたセントメアリーカソリックカレッジでは、日本の学校との違いに驚かされました。まず、教科ごとに先生方が移動するの

はなく、生徒たちが授業ごとに移動をしていました。さらに、授業開始のあいさつや終わりのあいさつというものがなく、先生が来たら授業が始まり、チャイムが鳴ったら授業が終わるという流れでした。ひとクラスの人数も少なく、ほとんどが選択制でした。そして、給食はなく、弁当を毎日持っていて、ティータムというおやつ時間がありませんでした。授業の雰囲気も、日本の学校とはずいぶん違い、のびのびとした感じでみんなが授業を受けていて、一人ひとりが自分の個性をしっかり生かしているような感じを受けました。



日本の学校のスタイルとは大きく違うけれど、授業の大切さはいっしょなんだなと思いました。

(北部中 吉本 久晃)

## 普段着のお付き合い



校長 佐橋 正司  
(南部中学校校長)

緑の芝生が広がる公園の一角に建つ集会場に、三々五々ホストファミリーと一緒に生徒が集まり、サヨナラパーティーが始まった。

集会場の机の上には、家族が持ち寄った数種類の料理が並んでいる。メインディッシュは、2人のお父さんが黙々と焼いてくれたソーセイジを食パンにはさんだホットドッグである。

ケアンズだけでなく、カマリロでもそうであった。彼らの気取らず、飾らないもてなしが実に嬉しい。

そして、何よりも、幸田の中学生はナイスガイ、ナイスガールと褒めたたえてくれた彼らの笑顔と、差し出された握手の温もりが、今も思い出される。

